



Title	近世スウェーデンにおける軍事革命：初期ヴァーサ朝期からグスタヴ2世アドルフ期におけるスウェーデン軍制の展開
Author(s)	古谷, 大輔
Citation	大阪大学世界言語研究センター論集. 2010, 3, p. 1-28
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/8974">https://hdl.handle.net/11094/8974</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

近世スウェーデンにおける軍事革命  
—初期ヴァーサ朝期からグスタヴ2世アードルフ期におけるスウェーデン軍制の展開—

古谷大輔

FURUYA Daisuke

Abstract :

**The Military Revolution in Early Modern Sweden:  
Historical Development of the Swedish Military System from  
the Early Vasa Era to the Reign of Gustav II Adolf**

The early modern European states experienced the qualitative change of war with using firearms and the expansion of scale. Some European rulers tried to build the administrative system in order to exploit human and material resources, and develop the permanent military system. Therefore some European historians have pointed out that such change of war had stirred up the well-ordered formation of the modern state, and they have called such historical development based on the relationship between war and state as “the Military Revolution” in the early modern Europe. Among debates on the “Military Revolution”, the early modern Sweden has been recognized as the “modeled” state that could have developed the military management with installing the administrative organizations to exploit limited resources, because Sweden made a go of the new tactics by the well-disciplined soldiers at the Thirty Years’ War in Germany. How could the early modern Sweden develop the efficient military system and carry on the military activities at the overseas battlefields, although the Swedish human and material resources were so limited in the northern peripheral area of Europe? The purpose of this paper is to make clear the historical development of Swedish military system in the early modern times. To make the Swedish characters of its process more clearly, first, this paper focuses on the relationship between the new military system and the traditional political or social framework of Sweden. Secondly, to make the actual conditions of Swedish military management more correctly, this paper examines the development of the Swedish military system in the context of the early modern Baltic and German area.

**Keywords :** Military Revolution, State Formation, Early Modern Europe, Early Modern Sweden, Thirty Years’ War.

キーワード：軍事革命，国家形成，近世ヨーロッパ，近世スウェーデン，三十年戦争

## 1. はじめに

### (1) 近世ヨーロッパにおける軍事革命と国家形成

近世ヨーロッパにおける軍事技術の革新とそれに伴う軍事組織の変革は、一定領域内において唯一国家こそが暴力装置の独占を当該地域の社会集団に認知させ、軍事力を基盤とした秩序維持機能をもって社会統制の権能を集中させる契機となった。軍事経営の観点から見た近世ヨーロッパの政治・社会変革に関するこうした主張は、歴史学や歴史社会学において長らく共有されてきた古典的命題であり、近世ヨーロッパにおける軍事革命として知られている<sup>1</sup>。従来の軍事革命の議論に従えば、陸上・海上での戦闘において火器が多用されるにおよび、近世ヨーロッパでは火器を組み合わせた戦術の変革が生みだされた。この新たな戦術を実現するために、火器を伴った歩兵・砲兵を戦場で連携させる目的で軍隊に規律がもたらされた。また戦場へは大量の人的・物的資源が動員され、軍隊の規模が飛躍的に増大した。戦争に大量の資源を動員する目的で、国家は徴兵・徴税など効率的な行政管理機能を革新して地域社会への統制を強化し、その結果として集約的な国家経営の原型が築かれた。そして近世ヨーロッパ諸国の非ヨーロッパ世界への進出を通じて、こうした軍事技術の変革は非ヨーロッパ世界にも伝播し、その軍事行動と社会再編にも影響を与えた<sup>2</sup>。

以上に要約した変革の起きた時期について、この議論を1950年代に提唱したイギリスの近世スウェーデン史研究者ロバーツ (M. Roberts, 1908-97) は火砲戦術の普及した16~17世紀半ばに設定したが、その後この議論を批判的に発展させた研究者たちは、火砲戦術に対応した築城術など、18世紀に至る戦術革新の影響を主張したため見解の一致は見られない。しかしながら、いずれにせよ近世ヨーロッパ諸国の統治者は、火砲の使用に伴う新たな戦術へ対応可能な軍事組織の構築を通じて領域住民への統制を強化させたという点で見解の一致が見られる。すなわち近世ヨーロッパにおける国家形成の過程では、軍事経営に刺激される形で人的・物的資源の管理に関する新たな手法が模索され、その結果として近代的な集約的な国家経営の原型が築かれたと理解されている。そして本稿が扱うスウェーデンは、こうした近世ヨーロッパの軍事革命と国家形成の関係が論じられる際、典型的な事例として扱われてきたのである<sup>3</sup>。

1 我が国において近世ヨーロッパにおける軍事革命論を紹介した論考としては、以下を参照せよ。大久保桂子、「ヨーロッパ「軍事革命」論の射程」、『思想』、881号、1997年、151~171頁；大久保桂子、「軍事史の過去と現在」、『國學院雑誌』、98巻10号、1997年、30~44頁；玉木俊明、「ヨーロッパ近代国家形成をめぐる一試論—「軍事革命」・「軍事財政国家」・「プロテスタント=インターナショナル」』、『歴史の理論と教育』、95号、1997年、1~10頁。

2 軍事革命論を扱った代表的な業績は以下の通りである。M. Roberts, "The Military Revolution 1560-1660", Id., *Essays in Swedish History*, Minneapolis, 1966, pp.195-225 ; G. Parker, *The Military Revolution: Military Innovation and the Rise of the West, 1500-1800*, Cambridge, 1988 (G. バーカー, 大久保桂子訳, 『長篠の合戦の世界史—ヨーロッパ軍事革命の衝撃 1500~1800年』, 同文館出版, 1995年) ; J. Black, *A Military Revolution? Military Change and European Society 1550-1800*, London, 1991 ; C. L. Rodgers (ed.), *The Military Revolution Debate*, Boulder & San Francisco & Oxford, 1995.

3 スウェーデンを軍事国家の典型的なモデルとして考察する論考として代表的なものは以下の通りである。P. Anderson, *Lineages of the Absolutist State*, London, 1974 ; I. Wallerstein, *The Modern*

## (2) 近世スウェーデン史研究における戦争と国家

スウェーデンは12世紀以来その版図にフィンランドを含み、その面積は広大だった。しかしヨーロッパ世界の北の辺境に位置して人口は少なく、ヨーロッパ市場において貨幣収入を得るような経済資源も乏しかった<sup>4</sup>。そうしたスウェーデンが、17世紀前半から18世紀前半にかけてのおよそ一世紀の間、フィンランド・バルト海東岸地域・北ドイツなどを含むバルト海世界に広域支配圏を形成した。今日の歴史学者が便宜的に「バルト海帝国」と通称する版図全域で120万人程度の人口しか有さなかったヨーロッパ北縁の小国スウェーデンが、いかにして軍事的覇権を構築しえたのか。この問題は、20世紀以降のスウェーデン歴史学界だけではなく、欧米の歴史学界においても大きな関心をもって論じられてきた<sup>5</sup>。

20世紀のスウェーデン歴史学界において、近世のバルト海世界にスウェーデンが拡張主義的な外交政策を展開して広域支配圏を形成した理由は、外交史的観点と社会経済史的観点から解釈されてきた。外交史的見地に立つ者は、デンマークやポーランドなど、バルト海世界の隣接諸国からの侵略を阻止するために、いわば防壁として「バルト海帝国」と呼ばれる広域支配圏が形成されたと解釈した<sup>6</sup>。この解釈のもと、近世スウェーデンの国内社会については、官僚制度や軍事制度など、長期にわたる戦争を支えた国家機構の分析に主眼が置かれた。戦争経営の必要から創出された国制を集権的な近代国制の原型として解釈する議論は、後の軍事革命論の骨子を準備したと言えよう。その一方で経済史的見地に立って、東西ヨーロッパ間の貿易路の統制権をめぐる抗争が「バルト海帝国」構築の動

---

*World-System*, vol. 2, New York, 1980 (I. ウォーラーstein, 川北稔訳, 『近代世界システム 1600~1750』, 名古屋大学出版会, 1987年); C. Tilly, *Coercion, Capital and European States, AD 990-1990*, Oxford, 1990; B. M. Downing, *The Military Revolution and Political Change: Origin of Democracy and Autocracy in Early Modern Europe*, Princeton, 1992; T. Ertman, *Birth of the Leviathan: Building States and Regimes in Medieval and Early Modern Europe*, Cambridge, 1997. 軍事国家として近世スウェーデンの国家経営を扱った邦語文献としては、古谷大輔, 「近世スウェーデン軍事国家の展開—グスタフ2世アドルフ期からカール11世期にかけての軍事経営の変遷—」, 『北欧史研究』, 13号, 1996年, 53~68頁を参照せよ。

4 フィンランドは、12世紀以来1809年に至るまでスウェーデン王国内部の東部地域として服属した。本章では特にことわりがない場合、「スウェーデン」の呼称にはスウェーデンとフィンランドがともに含まれる。フィンランドも含む近世スウェーデンの国家・社会構造については以下を参照せよ。古谷大輔, 「近世スウェーデンにおける帰属概念の展開—ナショーンと祖国—」, 近藤和彦編, 『歴史的ヨーロッパの政治社会』, 山川出版社, 2008年, 74~110頁; J. Nordin, *Ett fattigt men fritt folk: nationell och politisk självbild i Sverige från sen stormaktstid till slutet av frihetstiden*, Stockholm, 2000.

5 近世スウェーデンの大国化に関しては、以下を参照せよ。K. R. Böhme, "Building a Baltic Empire, Aspect of Swedish Expansion 1560-1660", G. Rystad, K. R. Böhme, W. M. Carlgren (ed.), *The Baltic in Power Politics 1500-1990*, vol. 1, Lund 1994, pp. 177-220.; M. Roberts, *The Swedish Imperial Experience, 1560-1718*, Cambridge, 1979.

6 近世スウェーデンの大国化をめぐる研究史上の議論については、以下を参照せよ。根本聡, 「16・17世紀スウェーデンの帝国形成と商業—バルト海支配権をめぐる—」, 『関西大学西洋史論叢』, 3号, 2000年, 1~19頁; S. Troebst, "Debating the mercantile background to early modern Swedish empire-building: Michael Roberts versus Artur Attman", *European History Quarterly*, vol. 24, 1994, pp. 485-509.

因であると主張されるようになった<sup>7</sup>。経済史的観点に立った解釈はスウェーデン地方社会における資源動員の影響分析が進むことによって、戦争の主要因は農村社会から獲得される社会的余剰をめぐる諸身分間の抗争にあり、バルト海帝国は内なる抗争が外への拡大を要請した結果だったと解釈されるに至っている<sup>8</sup>。

「バルト海帝国」が国土防衛を目的として形成されたにせよ、海上交易の統制を目的に形成されたにせよ、その道程でスウェーデンが長期的な軍事経営を可能にする国制を実現させていたという点については、多数の歴史学研究者が意見を共有している。例えば近世スウェーデン歴代の国王に関する伝記研究は、デンマークを盟主とするカルマル連合からスウェーデンがヴァーサ王権のもとで自立した大北方戦争に至る時期に登位した為政者たちの政治的・軍事的指導者の資質に注目してきた<sup>9</sup>。そうした研究によれば、彼らの軍事指導者としての資質は、海外における軍事行動をはじめ、それを担保するスウェーデン国内の行財政制度や軍事制度の必要性を貴族層や農民層に対して主張するために有効だった。スウェーデンは、16世紀にあつてはカルマル連合からの自立をめぐる抗争、17世紀にあつてはバルト海世界の覇権を巡る隣接諸国との抗争のなかに置かれた。そのようなバルト海世界における諸国家間抗争におかれたスウェーデンの状況を盾にとり、歴代の国王はスウェーデン社会の保護を主張することで行財政制度と軍事制度の構築を進めた。

歴代の国王は、貴族・聖職者・都市住民・農民の四身分が参加する全国身分制議会（1617年以降は王国議会）において国家の保護者としての立場を主張し、王国議会での承認を得ながら農民を基盤とする軍事組織の構築を進めた<sup>10</sup>。それゆえ、近世ヨーロッパにあつて例外的に国政レベルでの合意形成を基盤として実現された近世スウェーデン国制は、スウェーデン内外の歴史学研究者によって長らく検討対象とされてきた<sup>11</sup>。彼らの関心は頻発

7 A. Attman, *The Russian and Polish Market in International Trade, 1500–1650*, Gothenburg, 1973 ; Id., *The Struggle for Baltic Markets : Powers in Conflict, 1558–1618*, Gothenburg, 1979.

8 近世スウェーデンの軍事国家化に関する古典的研究については、以下を参照せよ。S.A.Nilsson, *Krona och frälse i Sverige 1523–1594 : rusttjänst, länsväsende, godspolitik*, Lund, 1947 ; Id., *De stora krigens tid : om Sverige som militärstat och bondesamhälle*, Uppsala, 1990 ; J. Lindegren, *Maktstatens resurser : Danmark och Sverige under 1600-talet*, Uppsala, 2001.

9 こうした研究のうち、我が国でも容易に閲覧可能なものとしてロバーツによる以下の文献がある。M.Roberts, *Gustavus Adolphus : A History of Sweden, 1611–1632*, 2vols, London, 1953–58 ; Id., *Essays in Swedish History* ; Id., *The Early Vasas : A History of Sweden 1523–1611*, Cambridge, 1968 ; Id., *The Swedish Imperial Experience* ; Id., *From Oxenstierna to Charles XII : Four Studies*, Cambridge, 1991.

10 M.F.Metcalf (ed.), *The Riksdag : A History of the Swedish Parliament*, Stockholm, 1987.

11 近世スウェーデンの国制研究については、以下を参照せよ。N. Runeby, *Monarchia mixta : maktfördelningsdebatt i Sverige under den tidigare stormaktstiden*, Uppsala, 1962 ; K.Strömberg-Back, *Lagen, rätten, läran : politisk och kyrklig idédebatt i Sverige under Johan III : s tid*, Lund, 1963 ; D. Gaunt, *Utbildning till statens tjänst : en kollektivbiografi av stormaktstidens hovrättsaukskullanter*, Uppsala, 1975 ; U. Sjödel, *Riksråd och kungliga råd : rådskarriären 1602–1718*, Lund, 1975 ; K. Ågren, “Rise and decline of an aristocracy : the Swedish social and political elite in the 17th century”, *Scandinavian Journal of History*, vol. 1, 1976, pp. 50–80 ; P. Englund, *Det hotade huset : adliga föreställningar om samhället under stormaktstiden*, Stockholm, 1989 ; I.Svalenius, *Rikskansliet i Sverige 1560–1592*, Stockholm, 1992 ; S.Norrhem, *Uppkomlingarna : kanslötjänstemännen i 1600-talets Sverige och Europa*, Stockholm, 1993 ; J. Samuelson, *Aristokrat eller förädlad bonde ? : det svenska frälsets ekonomi, politik och sociala förbindelser under tiden 1523–1611*, Lund, 1993 ; F. Persson, *Servants of fortune : the Swedish*

した戦争のスウェーデン社会に対する影響に集中した。とりわけ「バルト海帝国」が最大版図を築いた17世紀中葉以降、歳出増加に伴って実施された国家エリートへの徴税権や王領地の譲渡、その結果として引き起こされた王室財政の逼迫と王国議会で展開された諸身分間の抗争、さらにこれら問題を対処する目的で実行された貴族特権と貴族領の削減に関する実態分析が進められた<sup>12</sup>。また欧米諸国の歴史学者は、身分制議会を停止させることなく王権と諸身分・諸社会集団間による合意形成を基盤に、戦争を目的とした人的・物的資源の動員体制が築かれた点に注目した<sup>13</sup>。こうした視点から欧米の歴史学界では、集約的な国家経営を実現する近代国家モデルの歴史的形成が論じられる際に、近世スウェーデンがその原点として位置づけられてきたのである。

しかしながら、20世紀以降のスウェーデン内外における研究によって、16～17世紀当時のスウェーデン社会から戦争目的に動員された人的・物的資源は決して豊かではなく、長期間に及ぶ大陸ヨーロッパでの戦争を経営するには限界があったという点も明らかにされてきた<sup>14</sup>。スウェーデンが参戦したヨーロッパ大陸での戦争は長期間継続され、また軍事革命論が主張するような戦術上の変革が見られたため、軍隊に必要な人的・物的資源は拡大の一途を辿った。しかしながら、近世ヨーロッパの軍制においては一般的であった軍事企業家を通じた傭兵雇用に関して、スウェーデンは傭兵雇用に必要な貨幣収入を得る物的資源に恵まれなかった。また近世スウェーデンの財政史研究が解明してきたように、三十年戦争終結後の17世紀中葉には一部の国家エリート層に対する王領地や租税徴収権の譲渡の結果、歳入減少が深刻化していたという事実が、財政面から見たスウェーデンの戦争経営の限界を示している。それゆえ、ヨーロッパ大陸におけるスウェーデン軍の成功とバルト海世界の軍事的覇権の基盤は、「戦争が戦争自らを養う」という言葉に従って、戦地における軍税、関税の徴収や同盟国からの援助金など、戦争を理由として外国から獲得できた資源に依拠していたと最終的には解釈されるに至っている<sup>15</sup>。

### (3) 本稿の問題設定

本稿はこうしたスウェーデンによる「バルト海帝国」の経験とスウェーデンにおける国家形成に関する議論を踏まえながら、軍事革命論の骨子に従って初期ヴァーサ朝からグス

---

*court between 1598 and 1721*, Lund, 1999.

12 入江幸二、『スウェーデン絶対王政研究－財政・軍事・バルト海帝国』、知泉書館、2005年。

13 注釈3に掲げた歴史社会学の業績を参照せよ。

14 海外からの資源に依拠した近世スウェーデンの軍事経営については、以下を参照せよ。S.Lundkvist, "Svensk krigsfinansiering 1630-1635", *Histrisk tidskrift*, 1966, s. 377-421; G. Lorenz, "Schweden und die französischen Hilfgelder von 1638 bis 1649: Ein Beitrag zur Finanzierung des Krieges im 17. Jahrhundert", *Forshungen und Quellen zur Geschichte des Dreissigjährigen Krieges*, Münster, 1980, S. 98-148.

15 「戦争が戦争自らを育む」というテーゼは、グスタフ・アドルフの書簡中にしばしば見られる。例えば、1628年4月1日にオクセンシェーナに送った書簡の中には、「…戦争が戦争自らを育むというのでない限り、これまで、われわれがなぜ成功してきたのかを説明することはできない…」とある。cf. C. Hallendorff (red.), *Tal och Skrifter av konung Gustav II Adolf*, Stockholm 1915, s. 102-103.

タヴ2世アードルフ期に至るスウェーデン軍制の展開を論じるものである<sup>16</sup>。しかしながら、従来の近世スウェーデンを事例とした国家形成と軍制に関する議論は、17世紀以降の新たな戦術の導入や長期化する戦争の負担に起因する財政危機に関心が集中するばかりに、それ以前のスウェーデン国制や軍制との関係について看過される傾向があった。そこで本稿は、15世紀以降のカルマル連合からの離反の過程に生み出されたスウェーデンにおける軍隊と社会の関係を論じることから出発し、次に16世紀前半に成立したヴァーサ朝スウェーデンにおける軍隊と社会の関係を論じることで、17世紀のバルト海世界における広域支配圏の前提となったスウェーデンの軍制を、スウェーデン国家の通時的展開のなかに位置づけて論ずることを第一の目標とする。

また従来のスウェーデンを事例とした軍事革命の議論は、グスタヴ2世アードルフ期に実践された新たな戦術の革新を可能にしたスウェーデン国内における軍制の整備に関心が集中してきた。しかしながら、実際のところ本稿が対象とする時期にスウェーデン軍が展開した戦地は、ほとんどの場合、バルト海東岸地域やドイツなど、スウェーデンから見れば外地にあたる大陸ヨーロッパだった。そこで、本稿は、15～17世紀に至るスウェーデン軍制の国内的発展を整理した後に、ドイツを主戦場とした三十年戦争を事例にとり、外地での軍事活動の長期化に伴うスウェーデン軍の変化を論じることで、より広範な大陸ヨーロッパの文脈から近世スウェーデンを例とする軍事革命論の新たな射程を提示することを第二の目標とする。

## 2. カルマル連合期以前のスウェーデン軍制

14世紀の末にカルマル連合が成立する以前のスウェーデンに、後に軍事大国として勃興しバルト海世界に広域支配圏を築くことを予期させる何らかの国制上の基盤は存在したのだろうか？この当時のスウェーデンは、国王が貴族身分によって選挙される選挙王政の君主国であり、中央集権の程度は希薄で王国参事会に集った一部の上級貴族層によって事実上統治されていた。王国参事会の内部で貴族層は王権から授封される領地と城塞の分配を自ら決定することができ、貴族は本来王室に属する城塞から地方社会を統治し、王室へ納められる地方税を徴収し軍事力を背景として当該地域に行政・司法権を行使した。この時期の軍事組織は、明確な組織論上の定義がなかったと言って良い<sup>17</sup>。

こうしたスウェーデンの国家システムは、国家が徴税権を保持していたため大陸ヨーロッパ諸国における封建制度と同等のものであると厳密に定義することはできない。しかし国家に属する徴税権は、貴族間で相互に移譲することも可能だった。王国参事会に集う上

16 初期ヴァーサ朝は、グスタヴ1世ヴァーサがスウェーデン王に登位することでスウェーデン王国がデンマーク王を盟主としたカルマル連合から自立した1523年から、グスタヴ1世の末子であるスウェーデン王カール9世が崩御した1611年までヴァーサ家からスウェーデン王が輩出された時期を言う。またグスタヴ2世アードルフの治世は1611年から1632年までの時期である。

17 中世後期のスウェーデン国制については、以下を参照せよ。G.Bjarne Larsson, *Stadgelagstiftning i senmedeltidens Sverige*, Stockholm, 1994; T.Riis, "The states of Scandinavia, c.1390-c.1536", *The New Cambridge Medieval History*, Vol. VII, Cambridge, 1998, pp. 671-706.

級貴族層が国家収入を管理したため、彼らは国家収入を着服することで自らの利益を得ることもできた。また上級貴族層はその財力をもって私的な軍事力を築くこともできた。とはいえ他のヨーロッパ諸国と比較するならば、スウェーデンの貴族層は個人的に所有する領地の面積も狭く、その統制下にある農民の数も少なかった。それゆえスウェーデンにおける貴族身分が保有した私的な軍事力は弱小であった<sup>18</sup>。

これに対して、この時期のスウェーデンにおける軍事力の基盤は農民に求められた。15世紀のカルマル連合からの離反の過程では、農民がデンマーク王権に対する反乱に自発的に参加したことによって、スウェーデン国内における農民身分の政治的発言力は増加した。農村共同体は、デンマーク軍やそれへの同調者に対して、共同体に帰属する農民を基盤として軽武装の歩兵集団を動員した。農民たちは石弓、斧、槍等で武装し、スウェーデンの森林地帯に侵攻したデンマークの騎兵や重装備の歩兵集団と戦った。スウェーデンの貴族層も自らが執政官として赴いた任地の農村共同体との間で信用関係を構築した場合、農民層から構成された民兵集団の指導者として選ばれることがあった。また、司教レベル以上のローマ・カトリック教会も自ら城館を建設して、武装した家来の一団を保つために資源を活用した<sup>19</sup>。

カルマル連合期のスウェーデンでは地方社会に権力は分散しており、結果的に国家による暴力装置の集中的独占は見られなかった。従って、貴族と農村共同体との間に信頼関係が醸成された場合にのみ、あるいは貴族家門間で盟約が成立された場合にのみ、一定の規模をもつ軍事行動が可能になった。中央にあっては王国参事会、地方にあっては貴族と有力な農民によって主導された地方法廷など、紛争解決のための行政的・司法的枠組が存在したが、軍事力を独自に保有する貴族や農村共同体などの利益集団が王国に抵抗する場合、そうした司法的枠組は効力をもたなかった。

そうした王国と対立する可能性のあった利益集団の一つには、ローマ・カトリック教会が含まれたことにも注視すべきであろう。教会は独自の課税権をスウェーデン国家から保証され、スウェーデン内部にあってウップサーラ大司教を頂点として隠然たる政治勢力を形成した。ウップサーラ大司教以下ローマ・カトリック教会の司教は王国参事会の構成員として国政に参画する一方、王国と利害が相反する場合には地方社会の聖職者と連携して全国的な抵抗運動を構築することが可能だった。

王国を牽制するもう一つの強力な利益集団は、ドイツ系商人だった。この時期のスウェーデンでは都市が未成熟であり、鉄や木材などの貿易もスウェーデン系商人よりは、むしろ

18 中世後期のスウェーデン貴族については、以下を参照せよ。H.Shück, "Sweden as aristocratic republic", *Scandinavian Journal of History*, vol. 9, 1984, pp. 65-72 ; E. Ulsig, "The Nobility of the late Middle Ages", *The Cambridge History of Scandinavia*, Vol. I, Cambridge, 2003, pp. 635-652.

19 中世後期のスウェーデン農民とその軍事力については、以下を参照せよ。D.Harrison, *Uppror och allianser : politiskt våld i 1400-talets svenska bondesamhälle*, Lund, 1997 ; P.Reinholdsson, *Uppror eller resningar? : samhällsorganisation och konflikt i senmedeltidens Sverige*, Uppsala, 1998 ; E. Orrman, "The condition of the rural population", *The Cambridge History of Scandinavia*, pp. 581-610.

るドイツ系商人によって支配された。ドイツ系商人は、スウェーデンの最も重要な取引相手であったリューベックの主導するハンザ同盟の軍事力によって保護されていた。また、それらハンザ同盟に属する都市出身のドイツ系商人に対しては、スウェーデンでの取引特権が王権によって付与されていた。それゆえに、ドイツ系商人によって管理される貿易に対して、スウェーデン政府は軍事力を背景に取引に関する課税を強制することは難しく、後年のように海外貿易から得られる利益が軍事力を維持するための財政的基盤として活用される余地はなかったと言える。

### 3. 初期ヴァーサ朝におけるスウェーデンの軍制

#### (1) カルマル連合からの離反とスウェーデン軍制の基底

こうしたスウェーデン国家の事情は、デンマークを盟主とするカルマル連合からの自立の過程で変化を迎えた<sup>20</sup>。スウェーデンは、1397年にデンマーク、ノルウェーとともにデンマーク王が主導する国家連合（いわゆるカルマル連合）に属した。連合は、デンマーク王女マルグレーテが後見人となったデンマーク王エーリックの下、バルト海世界においてはドイツのハンザ同盟と比肩しうる北欧諸国の連合構築を目的に結成された。しかしデンマーク王は、連合王としては連合独自の自律的な財政・軍事機構を構築することができず、1434年にはスウェーデン農民が連合からの自立を目指す反乱を起こした。その後スウェーデンが連合からの自立を達成した1523年までの間に、デンマーク王自身によってスウェーデンが直接統治されたのは12年間だけで、代わりにスウェーデンでは連合王の名代たる摂政が統治の任にあたった。スウェーデンにおける伝統な歴史叙述では、カルマル連合はスウェーデン支配を企図するデンマーク王権の野心的試みとして説明されてきた。しかしこの時期のデンマークの国家指導層は、スウェーデンを直接統治するというよりはデンマーク王の傀儡政権をスウェーデンに擁立し、実際にはスウェーデン上級貴族層から選出された摂政によって間接統治が行われていた。

15世紀末以来、スウェーデンでは、カルマル連合におけるデンマーク王の摂政を務めた名門貴族ステューレ家を中心に、上級貴族層を糾合して新たな国家形成を企図する動きが見られた。これがカルマル連合から自立する新たなスウェーデン国家の母体となる筈であった。しかし1520年にデンマーク王クリスチャン2世の率いるデンマーク軍が侵攻した際に当時の摂政ステン・ステューレは戦死し、スウェーデン側の政治指導者が失われるに至った。さらにクリスチャンはスウェーデンに対するデンマーク王権の指導力強化を図って、同年11月にストックホルムでステューレ派の貴族、聖職者を肅正した。「ストックホルムの血浴」と呼ばれたクリスチャンによる肅正の結果、伝統的な貴族家門に属する者は処刑ないしは亡命を余儀なくされ、一時的にスウェーデンにおける上級貴族層の支配が弱まり、有力な政治指導者に事欠くことにもなった。

20 カルマル連合期のスウェーデンについては、以下を参照せよ。H.Shück, "The political system", *The Cambridge History of Scandinavia*, pp. 679–709 ; J. E. Olesen, "Inter-Scandinavian relations", *The Cambridge History of Scandinavia*, pp. 710–770.

こうした情勢下にあった1521年にステューレ派に属した貴族グスタヴ・エーリックソンが、スウェーデン中央に位置するダーラナ地方の農民層の支持を得てデンマークへの反乱を指導し、自らのスウェーデン摂政就任を宣言した。彼は、翌22年にスウェーデンにおける将来的な税収と貿易特権を担保として、同じくデンマークと対立していたハンザ同盟都市リュベックから軍資金と水兵を得て、独自の海軍力を形成した<sup>21</sup>。翌23年にグスタヴは全国身分制議会においてスウェーデン国王に選出され、グスタヴ1世として王位に就いた。グスタヴが登位した当時、上級貴族層の多くはデンマークとの戦いで死んだか、クリスチャン2世の肅正によって処刑されたか、海外に亡命していたため、その勢力は一時的に弱められていた。従って、グスタヴは1520年代当時スウェーデン国内に残った有力家門に属する数少ない上級貴族層の一人であっただけでなく、その名望ゆえにカルマル連合に対する反乱の軍事指導者として農村共同体からの支持を集めることもできた。さらにグスタヴはルター派に基づく宗教改革を断行し、12世紀以来スウェーデン社会を牽制してきたローマ・カトリック教会の影響力を排除し、1527年までにローマ・カトリック教会の資産を没収して、軍事力を維持する財政的基盤として王権の管理下に置いた。グスタヴは、伝統的な有力家門に属する上級貴族層の弱体と農民をはじめとするスウェーデン国内の諸身分からの確固たる支持を背景に、デンマークと対抗する目的で迅速に新たな国家形成を進めた。彼の施策の根幹は、国王を中核とする行政管理部門と軍事部門の拡大に置かれていた。ローマ・カトリック教会から没収した資産を財政的基盤としながら、グスタヴは国王直轄の恒常的な軍事組織の構築を進めた。彼の軍事改革はリュベックを通じて雇用された外国人傭兵による常設海軍の創設から開始され、ヴァーサ朝スウェーデンの海軍力はバルト海世界の覇権をめぐる競争者に対してスウェーデンの軍事力を誇示することとなった<sup>22</sup>。

## (2) スウェーデン国法に依拠した軍制の確立

伝統的にスウェーデンの軍事力は、貴族身分から動員された騎兵と地方の農民共同体によって組織される民兵から構成されていた<sup>23</sup>。民兵は自らの出身地たる農村共同体がその安寧を犯されると判断された場合に動員され、平時にはその共同体内部で生計が維持されたため、事実上農村共同体が兵員を扶養していたと言える。また民兵集団の指揮は、当該の農村共同体によって共同体の利益を保護しようと信用された者を指揮官に選出し、担わ

21 H. Gustafsson, *Gamla riken, nya stater : Statsbildning, politisk kultur och identitet under Kalmarunionens upplösningsskede, 1512–1541*, Stockholm, 2000.

22 初期ヴァーサ朝における地方社会の状況に関しては以下を参照せよ。E. Österberg, *Gränsbygd under krig : Ekonomiska, demografiska och administrativa förhållanden i sydvästra Sverige under och efter nordiska sjuårskriget*, Lund, 1971 ; S. A. Nilsson, *De stora*, s. 31–104 ; M. Hallenberg, *Kungen, fogdarna och riket : Lokalförvaltning och statsbyggande under tidig Vasatid*, Stockholm, 2001.

23 中世から近世へかけてのスウェーデンにおける軍制の変化に関しては、以下を参照せよ。S.A.Nilsson, *På väg mot militärstaten : Krigsbefälets etablering i den äldre Vasatidens Sverige*, Uppsala, 1989, s. 3–9 ; Id., *De stora*, s. 9–14, s. 107–116.

れた。こうした農村共同体に立脚する民兵組織は、1350年に成文化されたスウェーデン王マグヌス・エリックソンによるスウェーデン国法に準じる慣習と理解され、歴代の国王や王国参事会はこの国法を根拠として民衆動員を農村に課した。カルマル連合からの自立過程における軍事組織もこの形態を踏襲するものであり、1523年に国王に選出されたグスタヴは、スウェーデン農村社会からデンマークに対する軍事行動の指揮を委任された農民軍の指導者たる性格を有していた。

その一方、彼はリューベックからの軍資金に基づき、ドイツ出身の傭兵からなる国王直属の専門的軍人集団を組織して1540年代までそれを活用した。為政者によって直接監督されるとともに平時に解散されない常設軍の創設は、スウェーデン史上これがはじめてのものであった。この時期の傭兵組織の規模はおよそ2000～3000人程度であり、1534～36年にデンマークで勃発した内戦（デンマーク史で言う「伯爵戦争」）への軍事介入や、デンマークとの国境に隣接するスウェーデン南部のスモーランド地方で勃発した農民反乱の鎮圧に活用された。しかし1540年代前半からグスタヴ1世は外国人傭兵に依拠して構成された常備兵力の方針を転換し、専門的戦闘員ではないものの兵員規模のより大きな軍隊の構築を目指した。その兵員総数は、1550年代におよそ15,000人から17,000人程度だったとされている。新たに拡張された歩兵は民兵徴発の伝統に基づいて動員された。1544年に開催された全国身分制議会では、常備軍以前のスウェーデンの法慣習を根拠としながら、事実上の常備軍導入が決定された。法的には民兵徴発という伝統に従ったが、グスタヴはその軍隊構造を戦時に即応可能な常備兵力に改革しようとした。

グスタヴ1世は、同時期に導入されていた王国代官を通じて彼自身の権力を地方社会に浸透させる目的でもこの軍事組織の革新を利用した<sup>24</sup>。彼は新しい軍事制度を構築する際に、この軍事力が国王に対して反旗を翻すことのないよう、スウェーデンの農民共同体に過度の負担を課すことなくその秩序を維持しつつも、国家の統制下にこれを置くことに腐心した。動員された兵士の生活は国家がこれを保証する一方、兵士の出身農村共同体ではなく、国王によって直接任命される将校の指揮下に行動する歩兵連隊へと組織化された。兵役に服した者は国王代官によって兵員に登録され、その管理下で短期間の軍事訓練や武器調達などの対価が国家から支払われた。農民から徴発された兵士は、彼らの出身地たる農村共同体の構成員だったが、いわば国家権力の後見を得た民兵組織として、短期間ながら共同体の同意を得なくとも、農業社会の生活サイクルから切り離された国家勤務に服することができた。このように農村社会の実情に適合するよう配慮された新しい軍事制度に対する農村社会から抵抗という事実を16世紀半ばに我々は見出すことができない。これは

24 近世スウェーデンの農民・国家・戦争との関係に関しては、以下を参照せよ。E. Österberg, *Gränsbygd*; H. Ylikangas, *Klubbekriget : Det blodiga bonde kriget i Finland 1596-97*, Stockholm, 1999; J. Lindegren, *Utskrivning och utsugning : Produktion och reproduktion i Bygdeå, 1620-1679*, Uppsala, 1980. グスタヴ1世期における代官制などの地方行政制度については、S. Claeson, *Häradshövdingeämbetet i senmedeltidens och Gustav Vasas Sverige*, Stockholm, 1987.

一方ではバルト海世界を巡る国際関係が北方七年戦争の勃発する1563年まで平穏であり、他方では短期間の軍事教練を除けば平時における軍務が過度な負担として農民層に認識されなかった結果だと考えられている。騎兵に関しては、初期ヴァーサ朝以前より貴族身分による奉仕義務であったが、グスタヴは志願制による騎兵も導入した。また彼は、大砲をはじめとする火砲を導入するとともに、火砲による包圍攻城戦に対応可能な城塞を建設した。グスタヴのもとで、軍隊は主に防御戦術を中心に訓練が施された。農民出身の民兵は伝統的に森林地帯を戦場とした防衛的戦闘に熟達していたため、農民層はこうした防衛戦術の訓練を容易に受け入れることができたとも言われている<sup>25</sup>。

### (3) 外地での軍事活動に対するスウェーデン軍の不適合

グスタヴ1世崩御(1560年)の後に登位したスウェーデン王エーリック14世の下で、兵員の規模はおおよそ26,000~28,000人程度に増強された。これは、ドイツ騎士団の勢力後退に伴って発生したリヴォニアを巡る抗争にスウェーデンも関与し、バルト海東岸部への拡張が企図されたためである。エーリックは、内地防衛を目的として動員された軽武装の民兵組織を、重武装化された歩兵部隊を基盤としながら戦場たる外地において攻撃的な軍事行動を展開することが可能な組織へ改変することを企図した。その結果として長槍で武装したスウェーデン歩兵は、古代ローマ帝国の軍事思想の影響を受けた集団戦術を実現するために新しい軍事訓練を受け、攻撃的性格が付与された<sup>26</sup>。エーリックによるバルト海東岸への拡張政策に反対して、エーリックを王位から放逐して1568年に王位に就いたヨーハン3世は、バルト海世界の覇権抗争にポーランドとの同盟をもって臨んだ。一時的にバルト海世界の覇権抗争からスウェーデンを撤退させた彼は、スウェーデン国内での支持基盤拡張を目的として、農民に対して負担の少ない軍事勤務を約した。スウェーデン軍は、エーリックが開始したバルト海東方での戦争で増加した兵員数をおおよそ20,000人以下の規模にまで減らした。

この当時のスウェーデン軍は、バルト海東岸で展開された攻撃的な戦闘行為を目的としたにもかかわらず、徴募された兵士の気質は伝統的な郷土防衛を指向する民兵のままだったと言われている。それゆえ1610年代後半までスウェーデンが海外での戦争に従事する場合、出征したスウェーデン兵による戦闘義務の放棄が頻発した。これを補うために外国人傭兵が重用されたが、傭兵を多数雇用することは財政的負担をスウェーデンに強いた。またスウェーデンへ傭兵を提供した軍事企業家はドイツをはじめとする大陸ヨーロッパ中

25 グスタヴ1世期における軍制改革については、以下を参照せよ。M. Hallenberg, *Kungen*; L. O. Larsson, "Gustav Vasa och "den nationella härren"", *Scandia*, vol. 33, 1967, s. 250-269.

26 初期ヴァーサ朝における軍事政策については、以下を参照せよ。B.C.Barkman, *Kungl. Svea Livgardes historia*, 2 vols, Stockholm, 1937-39; A. Valjanti, *Gustav Vasas ryska krig, 1554-1557*, Stockholm, 1957; A.Stille, *De ledande idéerna i krigföringen i Norden, 1563-1570*, Lund, 1918; Generalstabens (red.), *Axtorna: En studie i organisationen och taktik*, Stockholm, 1926. とりわけこの時期の兵員規模と徴兵については、以下を参照せよ。J. Mankell, *Uppgifter rörande svenska krigsmaktens styrka, sammansättning och fördelning*, Stockholm, 1865; B.C.Barkman, *Kungl.*, vol. 2; J. Lindgren, *Maktstatens*, s. 120-189.

核部における戦争にメリットを見出す一方で、ヨーロッパ辺境のバルト海東岸部における抗争に対して有能な職業軍人を派遣することは消極的だった。それゆえにスウェーデンは海外から提供される軍事力に依存せず、スウェーデン・フィンランド出身の農民を基盤としながら外地において長期の戦闘活動に従事できる軍事体制を構築することに迫られた。

他方、ヴァーサ朝王権を頂点とする集約的な軍事行動の成立過程において、断続的な外地における戦争状態がもたらした長期的な帰結は、スウェーデンの貴族・非貴族身分出身者、あるいは海外出身者から成る将校団という新たな社会階層の発展であった<sup>27</sup>。彼らは将校として国家勤務の機会を得ることで社会的地位の上昇の可能性を得るとともに、国王から領地を下賜された。上級将校らへの王領地の譲渡は長期的に王室歳入が減少する結果をもたらしたため、近世スウェーデンをめぐる主要な政治・社会問題としてスウェーデン歴史学界では古くから分析対象とされてきた。王領地の譲渡は17世紀半ば以降、深刻な財政問題を招来する結果をもたらしたが、これを報酬の条件として軍務に就いた将校が17世紀前半のスウェーデン軍事体制の確立に欠くべからざる役割を担ったことには注視せねばならない。

そもそも将校団の発展は、16世紀後半以降、外地で展開された戦争に従来のスウェーデン軍の指揮系統では対応しきれず、苦戦した経験から出発した。とりわけスウェーデン王を僭称したポーランド王シギスムントを放逐した後、1604年に即位したカール9世の治世期には、1600～08年のポーランドヤリヴォニアでの戦闘、1611～13年のデンマークとの戦闘において、少数のマスケット銃で武装した農民出身の歩兵に基盤を置いた戦術では十分な戦果を得られないことが明らかとなった。これは、単に火器を導入するだけでは近世以降の新たな戦争には対応できなかったことを意味し、それゆえに火器を効率的に組み合わせた戦術を実現するには、指揮系統の確立による軍隊行動が必要とされていった。17世紀初頭までのスウェーデン軍は、数百人規模の軍団を単位として構成され、それぞれの軍団にはスウェーデン政府や国王へ報告義務を有する士官が単独で配されているのみだった。軍団という戦術単位の上位にこれら軍団を包括する軍制上の組織単位はなく、軍団間の連携行動を指揮する上級将校も存在しなかった。そのためスウェーデン軍の外地における攻撃的な戦闘行為の能力は制限された<sup>28</sup>。そのほかにも、ポーランドヤリヴォニアでの苦戦の原因は、火器の使用に熟達した外国人傭兵の雇用が財政上制限されていたこと、歩兵集団と連携する騎兵が弱体だったことなどにも求められている。スウェーデン軍騎兵はバルト海東岸で対峙したポーランド軍騎兵と比較してその規模は小さく、スウェーデン

27 近世スウェーデン軍における将校団の形成については、以下を参照せよ。G. Artéus, *Till militärstatens förhistoria : krig, professionalisering och social förändring under Vasasönnernas regering*, Stockholm, 1986 ; S. A. Nilsson, *På väg* ; G. Gäransson, *Vitrus Militaris : Officersideal i Sverige, 1560-1718*, Lund 1990 ; K. R. Böhme, "Officersrekryteringen vid tre landskapsregementen, 1626-1682", *Bördor, bönder, börd i 1600-talets Sverige*, Uppsala, 1979, s. 215-251 ; B. Asker, *Officerna i det svenska samhället, 1650-1700*, Uppsala, 1983.

28 三十年戦争参戦以前のグスタヴ2世アードルフ期におけるスウェーデンの軍事行動については、以下を参照せよ。Generalstaben (red.), *Sveriges krig, 1611-1632*, 8 vols, Stockholm, 1936-39 ; B. C. Barkman & S. Lindkvist, *Kungl. Svea Livgardes historia*, Vol. 1 : 1, Stockholm, 1963.

産馬も劣った。「北方の獅子王」として歴史上に勇名を馳せるグスタヴ2世アドルフが登場する直前のスウェーデン軍は、外地での軍事行動を継続させ、戦果を得るには以上のような課題が存在した。

#### 4. グスタヴ2世アドルフ期のスウェーデン軍制

##### (1) 戦術・組織・兵站を刷新する軍制改革

カルマル連合の経験以来、ヴァーサ朝の歴代国王は国家元首として軍隊を管理・統制するとともに、軍隊に関わる者の扶養について義務を負った。その代わりとして、地方社会の代表が集結した王国議会は国王に対して国防を委任した。国王は兵士と将校の任命、兵員・武器の補充、訓練の実施などの最終的責任を担ったことから、同時代の大陸ヨーロッパ世界における軍人企業家にほぼ相当する役割を、スウェーデンでは国王自身が担っていたと言えよう。例えば、近世スウェーデンにとって最大の抗争相手であったデンマークでは常設の軍事力がなく、最高司令官を含む将兵の雇用について主にドイツ系の軍人企業家に依存していたことは、スウェーデンとの大きな違いであった<sup>29</sup>。1611年に王位に就いたグスタヴ2世アドルフは、国王が軍隊の管理運営を直接指導できるよう志向し、軍制改革を始めた。スウェーデンは他のヨーロッパ諸国とは異なり、軍事を通じて政治的・社会的勢力を誇る既得権益者の存在が薄く、その代わりに民兵組織と兵員徴募の伝統が存在していた。グスタヴが17世紀前半において軍制改革を断行できた背景に、我々はこうしたカルマル連合期以来に培われたスウェーデンに独特な軍事をめぐる政治・社会的状況に注目すべきであろう。

グスタヴによる軍制改革の主眼は、広範な領域を制圧するために攻撃的な軍事活動を展開できる軍隊を実現することにあった<sup>30</sup>。17世紀初頭のバルト海東岸における戦闘の経験から、長距離行軍の後に外地における戦闘と領域制圧を継続的に持続可能な戦術・組織・兵站の確立が必要とされた。外地における攻撃的な戦闘を実現するために、グスタヴは戦術を革新した。従来の軍事革命論がとりわけ注目してきたグスタヴ治世期のスウェーデン軍による三兵戦術の創出である。三兵戦術は、小銃兵の一斉射撃、サーベルを有する騎兵の突撃、砲兵隊による支援砲撃を組み合わせた戦術を言う。歩兵の用兵術に規律を求める発想は同時代のネーデルラントからもたらされていたが、スウェーデン軍はポーランドとの戦闘の経験から規律化された歩兵運用に騎兵運用の項目を加え、歩兵・騎兵を移動火砲で支援する戦術を構想した。この戦術を実現するためには、将校の指揮に基づく歩兵・騎兵・砲兵の連携行動、それを実現するための規律と訓練が必要とされた。

29 例えば同時期のデンマークについては、P. D. Lockhart, *Denmark in the Thirty Years' War: King Christian IV and the Decline of the Ordenburg State*, Selinsgrove, 1996を参照せよ。また三十年戦争におけるデンマークとスウェーデンの財政手法については、K.Krüger, "Dänische und Schwedische Kriegsfinanzierung im Dreissigjährigen Krieg bis 1635", K.Repgen (ed.), *Krieg des Dreissigjährigen Krieges in Deutschland*, Münster, 1991.

30 グスタヴ2世アドルフ期における軍制改革については、以下を参照せよ。M. Roberts, *Gustavus Adolphus*, Vol. 2, pp. 169-271; B. C. Barkman, *Gustav II Adolfs regementsorganisation vid det inhemska infanteriet*, Stockholm, 1931.

## (2) 恒久的な兵士動員体制の確立

戦術面での革新と並行して必要とされた改革は、長期間の戦闘を外地で継続可能なスウェーデン国内における資源動員の体制確立であった。グスタヴ自身もしばしば語った「戦争は戦争自らを養う」という原則は、戦地における略奪を容認するという内容ではなかった。略奪は軍隊の指揮系統と規律の混乱をもたらすだけでなく、長期的には軍隊の駐屯する占領地の経済を破壊し、外地における軍隊の扶養を困難にするものだったからである。それゆえに、グスタヴは戦地における略奪回避の方針をとり、これに代わる国内からの資源動員の確保に努めた。

戦術面の強化と人的資源の安定供給という目的を同時に実現するために、スウェーデン国内では地方行政組織と連携する恒久的な連隊組織の構築が図られた。新たに導入された歩兵連隊は、同時期に進められた新たな地方行政区分である州の区分に従って構成され、それぞれの連隊は同郷の出身者からなる兵士で構成されるとともに、州に派遣された行政官僚による地方行政と軍政との間で連携が築かれた。騎兵連隊は各州内に8つの軍管区を設け、それぞれに連隊が配置されることになった。グスタヴ2世アードルフ期以前のスウェーデン軍に存在していた戦術単位である軍団については、それに属する明確な兵員数が定められていなかった。これに対してグスタヴの軍制改革で導入された各連隊は、騎兵連隊が1,000人、歩兵連隊が1,200人規模で構成されることが決定された。兵員数が確定された結果、これらの兵員は、1617年以降定期開催されるようになった王国議会においてスウェーデン国内の地域・社会集団の代表から徴発の承認を得て、供給されるようになった。各々の連隊には、連隊全体を統括する連隊長を頂点に、連隊の下位区分として配された中隊を指揮する複数の中隊長が指揮官として配された。1623年以來、スウェーデン・フィンランドには恒常的に27歩兵連隊、8騎兵連隊、1砲兵連隊が組織され、その兵員総数はおよそ40,000人規模となった。これとは別に2~3,000人規模で常設海軍も存在した。

グスタヴ治下のスウェーデン・フィンランドの人口はおよそ125万人程度であったとされている。それゆえ、この時代に新たに構成された軍にはスウェーデン・フィンランド住民のおよそ3.5パーセントが勤務したことになる<sup>31</sup>。地方行政区分である州に基づいた連隊を基本単位として兵士が動員されるというスウェーデン軍の基本構造は、その後20世紀初頭まで維持された。地方行政と連携した兵員供給は、地方社会に対する課税調査の情報を援用しながら、各々の地区で新兵徴募のベースを算定できる利点があった。グスタヴ治下の徴兵制度では、まず徴兵資格を有する住民が壮丁名簿に登録された。壮丁名簿に登録された者は、ロータ(rota)と呼ばれる徴兵区分にさらに整理された。ロータは独立自営農民と王領地農民の場合には徴兵資格者10人、貴族領農民の場合には20人から構成され、

31 グスタヴ2世アードルフ期における兵員規模と徴兵については、以下を参照せよ。J. Mankell, *Uppgifter*; N.E. Villstrand, *Anpassning eller protest: Lokalsamhället inför utskrivningarna av folket till den svenska krigsmakten, 1620-1679*, Åbo, 1992; J. Lindegren, *Maktstatens*. この節における数値は主に Mankell に依拠した。

徴兵目的に各州の連隊から派遣された士官、地元の聖職者や行政官などの協議の結果、ロータの中から1人が兵士として選抜された。ここで兵士として選抜されなかった他の登録住民は、新兵に選出された者に対して金銭的支援を義務づけられており、同一の農村共同体における相互扶助を基盤として近世スウェーデン軍の兵員は確保されていた。その一方で、騎兵連隊と歩兵連隊ともに、新兵への志願もそれぞれの州独自の裁量で実行された。

### (3) 新たな戦術を可能とする戦術単位の創出

各々の歩兵連隊はその下位区分として中隊が設定され、平時における徴募や訓練、戦時における直接戦闘など、軍事経営の基本単位となった。各中隊は原則的に126人の歩兵、中隊長以下3人の士官、5人の下士官、6人の兵長、数名の鼓笛手から構成されていた。実際の戦場において直接指揮にあたる士官・下士官の数が増加したことで、戦場で規律をもった軍事行動が可能になり、ここに国王を最高司令官とする上意下達の指揮系統が確立されていった。また士官が増員されたことは、軍務を通じて社会的上昇の機会を得る者の数が増加したことも意味した。各歩兵連隊には、戦闘行為に及んだ際、各中隊を連携しながら独立した軍事行動を行える戦術上の単位として大隊も設定された。大隊は通常4個中隊で構成され、将兵を含め原則として564人の規模、それぞれの大隊はマスケット銃を有する銃士と槍兵が配され、これにサーベルでの攻撃を基本とする騎兵が加わった。また機動性を伴う火力を確保する目的で、2~3名の兵士によって移動可能な銅製の軽量大砲が開発、配備された。3~4個大隊が連携して旅団を形成する場合もあった。この大隊が上述した三兵戦術の基本単位とされていったのである。

地方行政を基盤に動員され、新たな戦術に対応することを目的として再構成されたスウェーデン軍の構造は1620年までに計画され、1621~29年のポーランドとの戦争で実践に移された。このスウェーデン軍の構造はそれ以後ほとんど変更されることはなく、戦場となった外地に展開する軍隊へスウェーデン本国からの兵員を補充した。恒常的に戦時下にあった17世紀前半とは異なり、1660年代以降のスウェーデンは、1675~79年にスカンディナヴィア半島南端のスコネ地方の領有を巡ってデンマークと争ったスコネ戦争を別とすれば、長い平時状態にあった。しかしこの時期においてもスウェーデン国内では中隊を基盤に軍事教練が実施された。高度な戦術への対応が平時の農村社会で維持されていたことは、18世紀初頭に戦われた大北方戦争の緒戦で証明された。

しかし、国内の地方社会を基盤として動員されたスウェーデン軍は、そのすべてが大陸の戦地に展開したわけではないことにも留意する必要がある。確かに1621~29年までポーランドとの戦争では、戦地となったバルト海東岸部へスウェーデン・フィンランドから動員された兵士が動員され、戦闘を行った。しかし兵士の負傷や病気の罹患、逃亡や死亡が多かったため随時国内での徴兵と外地への増派が継続された。1621年から三十年戦争への介入を開始した1630年までの間に、スウェーデン本国からはのべ約80,000人が徴兵され、派遣されたと推計されている。これがスウェーデン本土の農村経営と経済活動の荒廃をもたらしたため、1631年から1660年の時期には徴兵された人数はおよそ30,000から

45,000人にまで減少し、この数値が当時のスウェーデン地方社会が恒常的に軍隊へ人員を供給できた限界だったと考えられている<sup>32</sup>。ドイツで戦われた三十年戦争の時期には、地方社会から徴兵され構成されたスウェーデン軍の大半は、ドイツへの出兵に備えた教練と国内社会の治安維持を目的に本国ないしはバルト海東岸地域に駐屯し、これが敵対するデンマーク＝ノルウェー、ポーランド、ロシアに対する潜在的な牽制力として機能していた。

## 5. 三十年戦争に見るスウェーデン軍の特質と限界

### (1) ドイツにおける軍事行動を担保するスウェーデン軍への信用

このように築かれてきたスウェーデン軍の構成は、1630年夏の三十年戦争への介入によって大きく変化した<sup>33</sup>。三十年戦争時にドイツへ展開したスウェーデン軍の規模は、本来王国議会で動員が承認された兵員数の上限である約40,000名を凌駕する規模へと拡大したのである。傭兵雇用に関しても、ドイツへ参戦した当初のスウェーデンは、ドイツの軍事企業家が商品たる傭兵を提供するには信用ある顧客とは言えなかった。1630年代以前にスウェーデン軍がドイツ方面の戦争に参加してその実力を示したことは皆無であり、1630年代以前のバルト海東岸における戦争でもスウェーデン軍が雇用した傭兵数も少数だったため、ドイツの軍事企業家たちとスウェーデン軍との関係は浅く、スウェーデンへの信用は低かったためである。スウェーデンが1630年にドイツでの戦争に介入した時点でドイツ方面に展開したスウェーデン軍の規模はおよそ30,000人だったが、1630～32年にかけてのドイツにおけるスウェーデン軍の勝利以降、スウェーデン軍の兵力は劇的に増加して1632年には約100,000人規模に達した。しかし、ハイルブロン同盟締結とネルトリンゲンの戦いで敗北した1634～35年以降は約40,000人にまで減少した。ウェストファリア条約が締結された1648年には、本国から行軍したドイツ方面軍と傭兵部隊の総計はおよそ90,000人程であり、そのうち約70,000人がドイツ地域に駐屯した。カール10世が行った1655～60年の北方戦争の時期には、ドイツでのスウェーデンの戦勝に対する信用から軍事企業家による傭兵供給がなされ、スウェーデン軍は全体で55,000～70,000人規模で組織された。

スウェーデン軍が外地であるドイツにおいて長期的な軍事行動を可能にするには、外地での人的・物的資源の動員を担保するスウェーデン軍への信用が必要であった。1630年初頭にスウェーデンの軍事力に対する信用がドイツで高まった理由は、他の反ハプスブルク勢力がドイツへ積極的に介入しなかったこの時期に、ブライテンフェルト会戦(1631年)やリュッツェン会戦(1632年)において、スウェーデン軍が皇帝軍に対して勝利を収めたことに求められる。反ハプスブルク勢力あるいはプロテスタント諸国のうちイングラ

32 J. Glete, *War and the State in Early Modern Europe, Spain, the Dutch Republic and Sweden as fiscal-military states, 1500–1660*, London, 2002, p. 206.

33 三十年戦争参戦以後のスウェーデン軍の規模については、以下を参照せよ。Sveriges krig, vols 3–6, appendix ; J. Mankell, *Uppgifter* ; L. Tersmeden, *Carl X Gustavs armé*, Stockholm, 1979, s. 163–276.

ドとネーデルラントは三十年戦争に介入せず、神聖ローマ帝国の諸侯であったデンマーク王は1625～29年に参戦したものの帝国軍に敗北を喫していた。軍事的に強勢を誇ったフランスは同時期スペインとの戦争に集中することを余儀なくされており、参戦の可能性は少なかった。こうした状況下にあつて、スウェーデン軍はドイツに参戦した直後の1630～32年に戦われたいくつかの会戦において、三兵戦術を成功させた。三十年戦争介入の緒戦におけるスウェーデン軍の勝利はドイツにおけるスウェーデン軍への信用を高め、ドイツにおける人的・物的資源の動員を可能にし、長期間外地に軍事活動を展開するための前提を築いた<sup>34</sup>。

スウェーデン軍への信用は、スウェーデン軍によって有効性が示された新たな戦術のほかにも、バルト海世界を背景とした軍資金還流のシステムをスウェーデンが構築していた点からも担保された。スウェーデンは1620年代のバルト海東岸部における戦争経営の経験から得た外地における戦場での糧秣や宿営地の確保にノウハウがあり、1630年代以降は戦地となったドイツにおいてドイツ内の資源を組織的に管理して活用した<sup>35</sup>。また1620年代以降、スウェーデンはアムステルダムとバルト海沿岸の諸都市に財務取扱人を置いて、バルト海世界の各地へ軍資金を還流させる仕組みを保持していた<sup>36</sup>。三十年戦争の介入に際しては、1620年代の戦争においてスウェーデンが経験的に獲得した方法を総合させ、バルト海に面した港湾都市であるシュテッティンに置かれた戦時金庫から、ドイツ各方面に展開した連隊に軍資金が降り出された。スウェーデン国内やバルト海沿岸の港湾部からスウェーデン国家に納入された物資や資金を担保として、バルト海沿岸部で活躍した商人から前貸しされた軍資金は、戦地となったドイツにおいて短期的に処分可能な現金収入をスウェーデン軍に与えた。1620年代よりバルト海世界に構築されてきた資金還流の仕組みと外地における組織管理のノウハウが、1630年代以降のスウェーデン軍がドイツにあつて兵站を確保する前提となつたと言えよう。

ドイツにおけるスウェーデン軍への信用の高さは、出身地域の如何を問わずスウェーデンへの軍務に就いた者が多かつたことから窺い知ることができる。王国議会においてスウェーデン国内からの動員を認められていた兵員数は約40,000人規模であつたが、上述

34 三十年戦争参戦以後のスウェーデンの軍事行動については、以下を参照せよ。Sveriges krig, vols 3-6; S. Lundkvist, "Slaget vid Breitenfeld 1631", *Historisk Tidskrift*, vol. 83, 1963, s. 1-38; Forsvärsstaben (red.), *Slaget vid Jankow 1645*, Stockholm, 1945; L. Tingstern, *Huvuddragen av Sveriges politik och krigföring i Tyskland efter Gustav II Adolfs död till och med sommaren 1635*, Stockholm, 1930; L. Tingstern, *Fältmarskalkarna Johan Banér och Lennart Torstensson såsom härförare*, Stockholm, 1932; P. Sörensson, *Krisen vid de svenska arméerna i Tyskland efter Banér död, maj-november 1641*, Stockholm 1931

35 三十年戦争参戦に至る時期までにスウェーデンが実行していた戦地における軍隊経営の手法については、以下を参照せよ。E. Wendt, *Det svenska licentväsendet i Preussen, 1627-1635*, Uppsala, 1935; H. Landberg, L. Ekholm, R. Nordlund, S. A. Nilsson, *Det kontinentala krigets ekonomi, Studier i krigsfinansiering under svensk stormaktstid*, Kristianstad 1971; 古谷大輔, 「三十年戦争におけるスウェーデン王国の財政構造」, [IDUN—北欧研究], 17号, 2006年, 241-258頁。

36 大陸ヨーロッパにおける財務取扱人の活動については、S. Lundgren, *Johan Adler Salvius: Problem kring freden, krigsekonomin och maktkampen*, Lund, 1945が詳しい。

したように三十年戦争への参戦後、その兵員規模は急激に拡大した。外地であるドイツでの兵員補充は、スウェーデン軍はシュテッティンから降り出される軍資金を活用して、現地で直接兵員を雇用する場合と軍事企業家に委託する場合とがあった。スウェーデン軍が直接雇用する場合には、入隊時の準備金や毎月あたりの俸給が現金で支払われた。また当時の大陸ヨーロッパの諸国家では、恒常的な軍隊組織と規律的な軍事行動を可能にするために必要となる専門的な将校団が欠如していた。これに対してスウェーデンの軍事組織では上述したように1620年代までの経験から専門的将校団が形成されていた。1630年代以降のドイツにおいてスウェーデン軍は、出身地域の如何に関わらず軍務に携わる機会を提供し、後にブランデンブルク・プロイセンにおける軍制改革において、スウェーデン軍において実現されていた戦術や軍律を伝えたプーエル（Kurt Bertram von Pfuël, 1590–1649）やデルフリンガー（Georg Freiherr von Derfflinger, 1606–95）といった将校がこの時期のスウェーデン軍の将校団に加わっていた<sup>37</sup>。

## （2）ドイツにおけるスウェーデン軍の内情の変化

戦場となったドイツから見れば新参者であったスウェーデンが、ドイツ系の軍事企業家や諸侯、地域住民との間でどのようにして信用関係を構築して、資源動員を可能としたのか？また、1620年代以来徴兵された農民への徹底した軍事教練によって実現されてきた新たな戦術が、戦地において短時間で徴募された外国人傭兵を基盤としながらどのようにして実現されたのか？これらの問題は近世スウェーデンにおける軍事革命の展開を検討するうえで興味深い問題である。しかしながら戦時下のドイツにおける資源動員に関する研究は1630年代初頭のみ集中し、1630年代後半以降についてはスウェーデン政府が戦争終結にむけたドイツ諸侯に対する外交努力に関する研究は盛んであるものの、戦時財政関連の研究は現在でもほとんど存在しない<sup>38</sup>。それゆえに1635年のネルトリンゲン会戦の敗北によって、スウェーデンとプロテスタント諸侯との間に結成されたハイルブロン同盟が瓦解した後のドイツにおけるスウェーデン軍の資源動員の実態は未だ明らかにされていないと言える。

1630年代後半以降、ドイツに展開したスウェーデン軍の麾下ではおよそ500もの数百人規模のドイツ人連隊が展開し、それらの連隊は自らの組織経営を維持することを目的に、

37 プーエルは、1620年にブランデンブルク選帝侯女がグスタヴ2世アードルフに嫁いだ際に共にスウェーデンへ渡ってスウェーデン軍に属し、三十年戦争期にはスウェーデン陸軍元帥バネール（J. Banér, 1596–1641）の下で糧秣・宿営担当将校として活躍、1642年にブランデンブルクへ帰還した後、大選帝侯フリードリヒ＝ヴィルヘルムにスウェーデン軍制を模範とする軍制改革の覚書を上奏した。デルフリンガーは1632～48年までスウェーデン軍の騎兵連隊で軍務に就いた後、1655年にブランデンブルクへ帰還、1670年には陸軍元帥にまで昇進し、スウェーデン軍における軍務の知見に基づき17世紀後半のブランデンブルクの軍制改革を主導した。

38 三十年戦争参戦以降のスウェーデン軍による資源動員に関しては、以下を参照せよ。P. Sörensson, “Ekonomi och frigföring under Gustav II Adolfs tyska fälttåg 1630–1632”, *Scandia*, 1932, s. 265–320 ; G.Cliff, “Kring finansieringen av ett svenskt stormaktskrig”, Kungl. Livrustkammeraren (red.), *Historiska bilder*, Bd. 2, Stockholm 1948, s. 91–111 S.Lundkvist, “Svensk krigsfinansiering” ; *Det kontinentala krigets ekonomi*.

いわば自らの経済的報酬を求めて独自に戦闘行動を継続していた<sup>39</sup>。スウェーデンに兵員を提供した軍事企業家や彼らに雇用された兵士は、略奪や敵軍の資産接収などの報酬を期待してスウェーデンの軍事行動に加わった。スウェーデンでは、ネーデルラントに起源を發する新ストア主義とオラニエ公マウリッツ (Maurits van Nassau-Siegen, 1567-1625) によって制定されたネーデルラント軍法の影響下に、軍法が1621年に制定されていた<sup>40</sup>。この軍法は、兵員に対して厳格な宗教義務の履行、決闘や売春、宗教行事期間における飲酒などの禁止など、軍隊内での日常生活を厳格に律し、君主ならびに上官への服従、行軍における秩序維持、略奪の禁止など、徹底して規律化された行動を求めた。このスウェーデン軍法は、ドイツ参戦後の1632年にマインツにおいてドイツ語翻訳版が出版されたため、戦地となったドイツにも普及した。

しかし、この軍法が求めた軍隊の規律は1630年代後半以降実現することが困難になっていた。ネルトリンゲン会戦に敗北した1635年以降、スウェーデン軍への信用は一時的に低下し、これに加わる兵員数は減少した。そのためスウェーデン軍は、王国議会からの承認が得られるスウェーデン農民の動員を越える兵員数を外地で確保する問題に対して、軍事企業家が提供する傭兵を雇用することで対処せざるを得なかった。1630年代後半以降の連隊数の増加は、外地において軍事企業家に主導された部隊の急造を物語るものである。しかしスウェーデン軍指導部は、外地において軍事企業家によって提供された傭兵に現金で報酬を与えることができず、結果的に略奪などの利得行為を容認せざるを得なかった。かつてグスタヴ2世アドルフ自身は、長期的な戦争を継続するために必要となる兵站の経済的基盤を破壊せずに、スウェーデン軍の信用を外地で高め、さらには新たな戦術を実現するために軍隊の規律的行動を求めた。しかしその方針は、外地での長期的な軍事行動の帰結として選択された新たな募兵方針によって阻害される結果となったのである。

グスタヴ2世アドルフが1632年に戦死した後にドイツで展開したスウェーデン軍の指導者は、スウェーデン軍旗に対する一般兵卒の忠誠を得て兵員数を確保するために、戦場における私的な利得行為を報酬として認めざるを得なかった。同時にスウェーデン軍の指導部は、外国出身の将校に対してはスウェーデン貴族の称号を与え、いわばスウェーデンへの終身的雇用を認めることで彼らの軍務の報酬とした。外国出身の将校がスウェーデン王から地位を保証されることは、外地において糧秣や宿営地を確保する可能性を高める一方、そうした戦地における軍隊生活の基盤を提供できる将校の評判が一般の兵員を雇用

39 およそ500というドイツ人連隊の数はG. Tessin, *Die Deutschen Regimenter der Krone Schweden*, Teil I, Cologne, 1965, Sixに依る。テッシンはスウェーデン麾下に入ったドイツの同盟諸領邦の連隊を含めて推計している。

40 1621年に發布された軍法は、*Krigz lagh som glorwyrdigest i hoghkommelse konung Gustaff Adolph then andre och store, etc. Medh många herrlige och nyttige stycker fordom hafwer låhtit sammandraga förmehra och förbettra. Men nu vppå H. K. M. och höghläflige Sweriges rikkes regeringz nådige willia och behagh är, på finska emot swenskan: fäderneslandet til godo afftolckat, förfärdigat och publicerat aff Harttwijk Henrichszon Speitz Sexmäkiensi Tavast. Finnerio, Sveco, medh egen bekostningh*, Stockholm, 1644として活字化されたが、すでに1632年にはドイツ語訳がマインツで、英語訳がロンドンで公刊されていた。

する可能性をも高めた。このように1630年代後半以降のスウェーデンにとって、外地において長期的な軍事行動を実現させるためには、軍事行動の規律化以上に、将兵確保の観点から将兵の報酬を満足させる方法が優先させられたのである<sup>41</sup>。

### (3) ドイツにおける軍事行動の長期化に伴うスウェーデン軍の弱体化

このようにドイツでの軍事行動が長期化し、上述した方法に基づいて外国出身の将兵の数が増加したことは、結果的に三十年戦争参戦当初のスウェーデン軍が発揮した新たな戦術の実行を困難にした。これは1630年代半ば以降、ドイツに展開したスウェーデン軍が数度にわたる皇帝軍との会戦において決定的な勝利を収めることができなかったという事実が物語っている。従来の軍事革命論が主張した戦術の革新は、基本的にスウェーデン本国で動員されたおよそ40,000人規模での本国軍の組織を前提とした議論であった。また、この時期に革新された火器を伴う戦術は、決してスウェーデンだけの専有物ではなかった。1590年代以降のネーデルラントでオラニエ公マウリッツとナッサウ伯ヨハン（Johan IV van Nassau-Siegen, 1561–1623）により先鞭をつけられた新たな戦術は、三十年戦争にスウェーデンが参戦する以前の1618年～30年の時期にあって、すでにドイツのプロテスタント諸侯と軍事企業家、更にはデンマーク軍によって実践されていた。しかしながら、他のプロテスタント諸侯は、開戦時に急遽傭兵を雇用して軍事組織を構築する必要があった。その結果、複数の連隊の有機的な連携を必要とする戦術を有効に実現できず、カトリック連盟の軍隊に対して敗北を喫した。スペインに対するネーデルラントの独立戦争において実践された戦術の情報は、同時代のヨーロッパ世界に広く共有されていたものの、これを実現するには一定数の兵員を職業軍人として継続的に勤務させ、定期的な軍事教練を繰り返す必要があったのである。しかし三十年戦争におけるプロテスタント連合の軍隊は戦時に急遽寄せ集められて構成された軍隊であり、こうした戦術を実現する組織的演習も困難だった。

これに対して、三十年戦争参戦当初のスウェーデン軍による三兵戦術の成功は、徹底された軍法精神の下、国内で徴発された農民に対して軍事教練を施して実現されたものであった。1620年代にプロテスタント連合の下で戦った諸侯、軍事企業家、将兵の多くは、スウェーデンの参戦以降はスウェーデン王の麾下で軍務に就いた。ネーデルラントで実現された戦術に比べて、騎兵と砲兵の連携強化が特徴的だったスウェーデン軍の三兵戦術は、国内社会で動員され継続的な演習を経験した常備兵力を基に実現されていた。しかしながら、グスタヴ2世アードルフが戦死した1632年のリュッツェン会戦以降、実際にはドイツに展開したスウェーデン軍は苦戦を強いられていた。その理由としては、スウェーデンの軍旗の下にスウェーデン本国から展開したドイツ方面軍のほかに、新たにドイツ諸侯や軍事企業家、傭兵が加わったことによって、軍規の統一や新たな戦術に対応するための訓練が徹底することができなかったことが考えられよう。1634年のネルトリンゲン会戦敗

41 この時期の将校については、K. R. Böhme, "Officersrekryteringen" が詳しい。

北後、ドイツに展開したスウェーデン軍の戦術的勝利は、1636年のヴィットストック会戦や1641年のブライテンフェルト会戦などに限られた。これらの会戦は、バネール(Johan Banér, 1596-1641)やトシュテンソン(Lennart Torstenson, 1603-51)とったスウェーデン本国出身の陸軍元帥の指揮下にあったスウェーデン本国軍を中心とする組織の勝利であった。確かに、三十年戦争におけるスウェーデン軍はブライテンフェルト会戦やリュッツェン会戦といった緒戦においては三兵戦術の有効性を発揮した。しかしながら、外地での軍事行動の長期化と戦線の拡大に伴い、1620年代のバルト海東岸部での経験とは比較にならない規模での軍隊維持の問題に直面したときに選択された募兵方針が、ドイツにおけるスウェーデン軍の弱体化を招いた。

## 6. おわりに

### (1) バルト海世界を舞台としたスウェーデン軍制の展開

はたして以上に概観したような近世スウェーデンが、近世ヨーロッパの歴史的文脈に照らして軍事革命と称されてきた議論において、典型的な事例として認められるものと言えるのか？本稿の結論として、16~17世紀にスウェーデンが確立した軍制の展開を踏まえることからスウェーデンから見た軍事革命論の射程を論じたい。

従来の軍事革命論が主張したように、他のヨーロッパ諸国に類例を見ない王権を頂点とした軍事体制がスウェーデンに現出した前提は、スウェーデン王に独特な社会支配のための正統性の位置づけにあったと言える。カルマル連合からの自立以来、初期ヴァーサ朝の歴代国王は地域社会の保護を主張することによって権力の正統性を獲得した。ヴァーサ朝はカルマル連合からの自立の経験に基づいて、いわば農民反乱の軍事的指導者として農村共同体の保護者を自認した。また、デンマーク王権とローマ・カトリック教会の支配を放逐する建前を得て、ルター派の宗教改革を通じて領域内に自らを頂点とする政治・宗教上の支配体制を確立することができた。後世の歴史学者から見れば、王権を頂点に集権的な姿をもって築かれたように見える近世スウェーデンの国制は、そうしたカルマル連合自立以来のバルト海世界に見られた歴史的抗争関係の文脈に置いてこそ、はじめて現出したと言える。

こうした近世バルト海世界に固有な歴史的状況を背景としながら、歴代のスウェーデン国王は保護者として王国議会にて住民の同意を獲得しながら、国内社会の資源管理の手法と軍事組織を発展させた。とりわけスウェーデン王は、軍制をはじめとする国制の整備に関して農村共同体と結託した。他のヨーロッパ諸国では、軍事行動に伴う資源動員と軍隊組織の維持については、戦争から私的利益を得ようとする軍事企業家に依拠する事例が一般的だった。しかしスウェーデンにおいては、歴代のスウェーデン王は農村共同体から税を徴収することと引きかえに農村社会の保護を担い、農村共同体も国王による軍事的保護を認めて戦争を目的とする資源動員に同意を与えた。初期ヴァーサ朝の時代に確立された地方行政制度は、王権が農村共同体の経済・社会事情に関する情報を得る基盤となった。この制度は、17世紀以降の大陸における戦争に対して資源を動員する前提となった。初

期ヴァーサ朝以来、スウェーデン王は恒久的な軍事組織を確立し、軍事行動と資源動員を合法化するために農民身分も参加する王国議会を活用した。これらの事例に鑑みるならば、スウェーデンにおける軍制は近世ヨーロッパ世界に普遍的に存在したものというよりは、近世バルト海世界の政治事情と密接に関連した特殊な事情によって生み出されたものだったと言えよう。

しかし初期ヴァーサ朝に実現された軍制はバルト海東岸部において戦われた戦争にスウェーデンが参戦した際に、その限界を露呈した。戦場となった外地への資源移転が整備されず、また指揮命令系統が不備だったため、外地での戦闘は苦戦を強いられた。これらの問題に対して、グスタヴ2世アードルフ治下の国内の行政改革と有機的に結びついた軍制改革によって解決された。新たな地方行政単位を基盤として築かれた軍隊編成は、上級貴族層の一部によって形成された将校団によって指揮され、王国議会からの承認を得て徴発された農民出身の兵士は、徹底した軍事教練を受けるようになった。これにより貴族身分の一部は私的な軍事力を行使するのではなく、スウェーデン国家への勤務者へと転換した。自らの領地経営を離れた彼らは、拡張するスウェーデン国家の軍事機構・行政機構の一翼を担い、1634年に制定された政体法による国制の成文化によって、外地で国王が親征し国内に不在であっても、貴族を中心に国政をいわば「機械」的に運用できるようになった。このようにスウェーデンは、カルマル連合からの自立、1560年代、1610～20年代におけるバルト海世界の歴史で学んだ軍事経営の経験を、後の三十年戦争に活用することができた。そのようなバルト海世界での経験のなかで、グスタヴ1世からグスタヴ2世アードルフに至るまでのヴァーサ家の歴代国王はいわば自らが軍事企業家としての性格を有し、王国議会で国防の危機を訴えながら農民層からの人的・物的資源の動員について承認を得ていた。このように考えるならば、近世スウェーデンを事例とした軍事革命の議論は、まずバルト海世界の文脈のなかで育まれたスウェーデン固有の政治的・社会的文脈のなかで再考する必要があるだろう。

## (2) 恒常的軍事経営の確立をめぐる軍事革命論の可能性

王国議会で同意を得た資源規模を凌駕する軍事活動をスウェーデン軍が経験したのは、三十年戦争時のドイツ参戦がはじめてだった。ドイツでの戦争では、短期的に見ればスウェーデンの新たな戦術がスウェーデン軍の信用を急速に高める必要条件とはなったが、外地における長期間の軍事行動を可能にする十分条件にはなりえなかった。長期間に及ぶドイツでの行軍と駐屯には、将校団を中心とした恒常的な軍事組織の確立と教練の実施、規律の導入と兵站の確保といった日常的な管理運の継続が必要であった。他のヨーロッパ諸国が戦時にのみ軍事企業家の私的兵力に依存して軍隊を構成したのに対して、スウェーデンは地方行政を基盤として王国議会から承認された恒常的な軍事力が存在した。これこそがスウェーデンの三兵戦術を実現する基盤となっていたが、外地における非スウェーデン出身将兵の雇用はその基盤を切り崩すことになった。

そのようなドイツにおける軍事活動の変化に着目するならば、近世ヨーロッパにおける

スウェーデン軍制の意義は、従来の軍事革命論が主張したように新たな戦術にだけ注目するのではなく、17世紀前半のバルト海東岸における戦争の経験から得た外地における資源動員の手法にも注視すべきだろう。ドイツで軍隊を組織する財政的負担は膨大であり、これへの対応が問題となった。ドイツ参戦後のスウェーデン軍は、大規模化した軍隊に糧秣や宿营地を提供するという問題に直面した。確かにスウェーデンは、バルト海沿岸部で軍資金を還流させ、ドイツ国内の資源を動員する仕組みに基づいて、外地における軍隊経営を行った。こうしたノウハウが存在した点は、他のヨーロッパ諸国とは異なった点であり、それゆえにスウェーデンの軍事的覇権は単に三兵戦術の革新によってのみ構築されたのではないと言える。新たな戦術による軍事的成功は、短期的に見れば、一度の会戦で得られた勝利を元手として軍税や援助金を支払う同盟者を獲得し、彼らの軍隊をスウェーデン軍の指揮下に置く結果を生んだ。しかし長期的に見るならば、スウェーデンは増大する軍隊の維持という問題に直面し、結局のところ新たな戦術を可能にした軍律を事実上反故する外地での募兵方針をとった。外地での長期的な戦争を継続するには、当時のヨーロッパ諸国で一般的に見られた軍隊経営の手法へスウェーデンも回帰し、それが三十年戦争後期におけるスウェーデン軍の弱体化の一因ともなった。

スウェーデンは、1630年までにバルト海東岸で経験した戦争から、外地に軍隊を展開する軍事経営の手法、攻撃的戦術の実践、新たな兵器の使用に熟達することになった。連隊の指揮官として経験を積んだ将校も存在した。外国の領土で兵站を確保する経験も存在した。しかし、その成功は1630年代初頭という短期間においてしか有効ではなかった。古典的な軍事革命論に従って、ヨーロッパにおける戦争の質的变化を促した戦術の革新という点に限定するならば、近世ヨーロッパ世界の軍事において革命的な事例をスウェーデンが提供した時期は、この1630年代前半に限定されると言い換えても良い<sup>42</sup>。これに対して、スウェーデンが近世ヨーロッパ諸国に与えた長期的な影響を見るならば、我々は戦術という分野にのみ議論を限定すべきではない。むしろ軍法や徴兵制度、連隊経営といった恒常的な軍隊経営を支える制度が、後年ブランデンブルク・プロイセンやロシアといったバルト海世界に軍事国家として勃興する諸国に影響を与えた点に注目するならば、そうした社会と関わる軍制の革新こそが、近世ヨーロッパの国家・社会の変質というより大きな

42 三十年戦争以降の軍事活動に基づいたスウェーデンの拡張は、1655～60年に戦われた北方戦争(いわゆるカール・グスタフ戦争)によって停止し、それ以降バルト海世界におけるスウェーデンの広域支配圏が瓦解した1721年までにスウェーデンが従事した戦争は、スコネ戦争(1675～79年)と大北方戦争(1700～21年)に限られた。スウェーデン軍は、これらの戦争においてナルヴァ会戦(1700年)など数度の戦術的勝利を取めるものの、戦略的には勝利を取めることはなかった。17世紀後半以降のスウェーデン軍の弱体化の背景には、第一に北方戦争中の1658年に締結されたロスキレ条約によってスウェーデン国外に広範な版図を抱えることになったスウェーデンの国家指導層が、外地防衛に必要となる軍事負担の増加を回避する目的で外交方針を和平重視に転換したこと、第二にスコネ戦争の苦戦の経験から実行された軍制改革によって、三十年戦争期までに構築された戦地での資源動員に依拠した外地攻撃を目的とする軍隊から、スウェーデン農村の人的・物的資源を基盤に国土防衛を目的として編成される軍隊への質的転換が図られたことなどが挙げられる。Cf. Daisuke Furuya, "Transformation of Axis for Integration. On Historical Change of Discourse on Legitimacy of Swedish Empire in Early Modern Baltic Area", *Dimensionen des Friedens im frühneuzeitlichen Europa*, Institut für Europäische Kulturgeschichte, Universität Augsburg, 2009; 古谷大輔, 「近世スウェーデン軍事国家の展開」。

議論に結びつくものだろう<sup>43</sup>。軍事革命論は、戦場における戦術面の革新という短期的な視点よりは、戦時と平時との違いを問わず新たな軍制の浸透に伴う国家・社会の変化といったより長期的な視点にこそ、その新たな射程が開けているのである。

## 文献目録

- Anderson, P., 1974, *Lineages of the Absolutist State*, London.
- Artéus, G., 1986, *Till militärstatens förhistoria : krig, professionalisering och social förändring under Vasasönernas regering*, Stockholm.
- Asker, B., 1983, *Officerna i det svenska samhället, 1650–1700*, Uppsala.
- Attman, A., 1973, *The Russian and Polish Market in International Trade, 1500–1650*, Gothenburg.
- Id., 1979, *The Struggle for Baltic Markets : Powers in Conflict, 1558–1618*, Gothenburg.
- Barkman, B. C., 1931, *Gustav II Adolfs regementsorganisation vid det inhemska infanteriet*, Stockholm.
- Barkman, B. C. , 1937–39, *Kungl. Svea Livgardes historia*, 2 vols, Stockholm.
- Barkman, B. C., Lindkvist, S. , 1963, *Kungl. Svea Livgardes historia*, Vol. 1 : 1, Stockholm.
- Black, J., 1991, *A Military Revolution? Military Change and European Society 1550–1800* , London.
- Böhme K. R., 1979, "Officersrekryteringen vid tre landskapsregementen, 1626–1682", *Bördor, bönder, börd i 1600-talets Sverige*, Uppsala, s. 215–251.
- Böhme, K. R., 1994, "Building a Baltic Empire, Aspect of Swedish Expansion 1560–1660", G.Rystad, K.R.Böhme, W.M.Carlgrén (ed.), *The Baltic in Power Politics 1500–1990*, vol.1, Lund, pp. 177–220.
- Claeson, S., 1987, *Häradshövdingeämbetet i senmedeltidens och Gustav Vasas Sverige*, Stockholm.
- Cliff, G., 1948, "Kring finansieringen av ett svenskt stormaktskrig", Kungl. Livrustkammeraren (red.), *Historiska bilder*, Bd. 2, Stockholm, s. 91–111.
- Downing, B.M., 1992, *The Military Revolution and Political Change : Origin of Democracy and Autocracy in Early Modern Europe*, Princeton.
- Ekholm, L., Landberg, H., Nilsson, S. A., Nordlund, R., 1971, *Det kontinentala krigets ekonomi, Studier i krigsfinansiering under svensk stormaktstid*, Kristianstad.
- Englund, P., 1989, *Det hotade huset : adliga föreställningar om samhället under stormaktstiden*, Stockholm.
- Ertman, T., 1997, *Birth of the Leviathan : Building States and Regimes in Medieval and Early Modern Europe*, Cambridge.
- Forsvärsstaben (red.), 1945, *Slaget vid Jankow 1645*, Stockholm.
- 古谷大輔, 1996年, 「近世スウェーデン軍事国家の展開 —グスタフ2世アドルフ期からカール11世期にかけての軍事経営の変遷—」, 『北欧史研究』, 13号, 53–68頁.
- 同, 2006年, 「三十年戦争におけるスウェーデン王国の財政構造」, 『IDUN—北欧研究』, 17号, 241–258頁.
- 同, 2008年, 「近世スウェーデンにおける帰属概念の展開—ナションと祖国—」, 近藤和彦編, 『歴史的ヨーロッパの政治社会』, 山川出版社, 74–110頁.
- Gaunt, D., 1975, *Utbildning till statens tjänst : en kollektivbiografi av stormaktstidens hovrättsauskultanter*, Uppsala.

43 近世のドイツやロシアにスウェーデンの軍事経営が与えた影響については、以下の論考を参照せよ。C. Peterson, *Peter the Great's Administrative and Judicial Reforms : Swedish Antecedents and the Process of Reception*, Stockholm, 1979 ; D. Riches, "Early Modern Military Reform and the Connection between Sweden and Brandenburg-Prussia", *Scandinavian Studies*, Vol. 77, No. 3, pp. 347–364.

- Generalstaben (red.), 1926, *Axtorna : En studie i organisationen och taktik*, Stockholm.
- Generalstaben (red.), 1936–39, *Sveriges krig, 1611–1632*, 8 vols, Stockholm.
- Glete, J., 2002, *War and the State in Early Modern Europe, Spain, the Dutch Republic and Sweden as fiscal-military states, 1500–1660*, London.
- Gustafsson, H., 2000, *Gamla riken, nya stater : Statsbildning, politisk kultur och identitet under Kalmarunionens upplösningsskede, 1512–1541*, Stockholm.
- Gäransson, G., 1990, *Vitrus Militaris : Officersideal i Sverige, 1560–1718*, Lund.
- Hallenberg, M., 2001, *Kungen, fogdarna och riket : Lokalförvaltning och statsbyggande under tidig Vasatid*, Stockholm.
- Hallendorff, C., (red.) , 1915, *Tal och Skrifter av konung Gustav II Adolf*, Stockholm.
- Harrison, D., 1997, *Uppror och allianser : politiskt våld i 1400-talets svenska bondesamhälle*, Lund.
- 入江幸二, 2005年, 『スウェーデン絶対王政研究－財政・軍事・バルト海帝国』, 知泉書館.
- Krüger, K., 1994, "Dänische und Schwedische Krigsfinanzierung im Dreissigjährigen Krieg bis 1635", Larsson, G. B., *Stadsgelagstiftning i senmedeltidens Sverige*, Stockholm.
- Larsson, L.O., 1967, "Gustav Vasa och "den nationella härren" ", *Scandia*, vol.33, s. 250–269.
- Lindegren, J., 1980, *Utskrivning och utsugning : Produktion och reproduktion i Bygdeå, 1620–1679*, Uppsala.
- Id., 2001, *Maktstatens resurser : Danmark och Sverige under 1600-talet*, Uppsala.
- Lockhart, P. D., 1996, *Denmark in the Thirty Years' War : King Christian IV and the Decline of the Ordenburg State*, Selinsgrove.
- Lorenz, G., 1980, "Schweden und die französischen Hilfgelder von 1638 bis 1649 : Ein Beitrag zur Finanzierung des Krieges im 17. Jahrhundert", *Forschungen und Quellen zur Geschichte des Dreissigjährigen Krieges*, Münster, S. 98–148.
- Lundgren, S., 1945, *Johan Adler Salvius : Problem kring freden, krigsekonomin och maktkampen*, Lund.
- Id., 1963, "Slaget vid Breitenfeld 1631", *Historisk Tidskrift*, vol. 83, pp. 1–38.
- Id., 1966, "Svensk krigsfinansiering 1630–1635", *Historisk tidskrift*, vol. 86, pp. 377–421.
- Mankell, J., 1865, *Uppgifter rörande svenska krigsmaktens styrka, sammansättning och fördelning*, Stockholm.
- Metcalf, M.F., (ed.), 1987, *The Riksdag : A History of the Swedish Parliament*, Stockholm.
- 根本聡, 2000年, 「16・17世紀スウェーデンの帝国形成と商業－バルト海支配権をめぐる」, 『関西大学西洋史論叢』, 3号, 1～19頁.
- Nilsson, S.A., 1947, *Krona och frälse i Sverige 1523–1594 : rusttjänst, länsväsende, godspolitik*, Lund.
- Id., 1989, *På väg mot militärstaten : Krigsbefälets etablering i den äldre Vasatidens Sverige*, Uppsala.
- Id., 1990, *De stora krigens tid : om Sverige som militärstat och bondesamhälle*, Uppsala.
- Nordin, J., 2000, *Ett fattigt men fritt folk : nationell och politisk självbild i Sverige från sen stormaktstid till slutet av frihetstiden*, Stockholm.
- Norrhem, S., 1993, *Uppkomlingarna : kanslitjänstemännen i 1600-talets Sverige och Europa*, Stockholm.
- 大久保桂子, 1997年, 「軍事史の過去と現在」, 『國學院雑誌』, 98巻10号, 30～44頁.
- 同, 1997年, 「ヨーロッパ「軍事革命」論の射程」, 『思想』, 881号, 151～171頁.
- Olesen, J. E., 2003, "Inter-Scandinavian relations", *The Cambridge History of Scandinavia*, pp. 710–770.
- Orrman, E., 2003, "The condition of the rural population", *The Cambridge History of Scandinavia*, pp. 581–610.
- Parker, G., 1988, *The Military Revolution : Military Innovation and the Rise of the West, 1500–*

- 1800, Cambridge. (G. パーカー, 大久保桂子訳, 1995年, 『長篠の合戦の世界史—ヨーロッパ軍事革命の衝撃 1500~1800年』, 同文館出版.)
- Persson, F., 1999, *Servants of fortune : the Swedish court between 1598 and 1721*, Lund.
- Peterson, C., 1979, *Peter the Great's Administrative and Judicial Reforms : Swedish Antecedents and the Process of Reception*, Stockholm.
- Reinholdsson, P., 1998, *Uppror eller resningar? : samhällsorganisation och konflikt i senmedeltidens Sverige*, Uppsala.
- Repgen, K., (ed.), 1991, *Krieg des Dreissigjährigen Krieges in Deutschland*, Münster.
- Riches, D., 2005, "Early Modern Military Reform and the Connection between Sweden and Brandenburg-Prussia", *Scandinavian Studies*, Vol. 77, No. 3, pp. 347–364.
- Riis, T., 1998, "The states of Scandinavia, c.1390–c.1536", *The New Cambridge Medieval History*, Vol.VII, Cambridge.
- Roberts, M., 1953–58, *Gustavus Adolphus : A History of Sweden, 1611–1632*, 2vols, London.
- Id., 1967, *Essays in Swedish History*, Minneapolis.
- Id., 1968, *The Early Vasas : A History of Sweden 1523–1611*, Cambridge.
- Id., 1979, *The Swedish Imperial Experience, 1560–1718*, Cambridge.
- Id., 1991, *From Oxenstierna to Charles XII : Four Studies*, Cambridge.
- Rodgers (ed.), C.L., 1995, *The Military Revolution Debate*, Boulder&SanFrancisco&Oxford.
- Runeby, N., 1962, *Monarchia mixta : maktfördelningsdebatt i Sverige under den tidigare stormaktstiden*, Uppsala.
- Samuelson, J., 1993, *Aristokrat eller förädlad bonde ? : det svenska frälsets ekonomi, politik och sociala förbindelser under tiden 1523–1611*, Lund.
- Shück, H., 1984, "Sweden as aristocratic republic", *Scandinavian Journal of History*, vol. 9, pp. 65–72.
- Id., 2003, "The political system", *The Cambridge History of Scandinavia*, Vol. I, Cambridge, pp. 679–709.
- Sjödell, U., 1975, *Riksråd och kungliga råd : rådskarriären 1602–1718*, Lund.
- Stille, A., 1918, *De ledande idéerna i krigföringen i Norden, 1563–1570*, Lund.
- Svalenius, I., 1992, *Rikskansliet i Sverige 1560–1592*, Stockholm.
- Strömberg-Back, K., 1963, *Lagen, rätten, läran : politisk och kyrklig idédebatt i Sverige under Johan III : s tid*, Lund.
- Sörensson, P., 1931, *Krisen vid de svenska arméerna i Tyskland efter Banér död, maj-november 1641*, Stockholm.
- Id., 1932, "Ekonomi och frigöring under Gustav II Adolfs tyska fälttåg 1630–1632", *Scandia*, s. 265–320.
- 玉木俊明, 1997年, 「ヨーロッパ近代国家形成をめぐる一試論—「軍事革命」・「軍事財政国家」・「プロテスタント＝インターナショナル」」, 『歴史の理論と教育』, 95号, 1~10頁.
- Tersmeden, L., 1979, *Carl X Gustavs armé*, Stockholm.
- Tessin, G., 1965, *Die Deutschen Regimenter der Krone Schweden*, Teil I, Cologne.
- Tilly, C., 1990, *Coercion, Capital and European States, AD 990–1990*, Oxford.
- Tingstern, L., 1930, *Huvuddragen av Sveriges politik och krigföring i Tyskland efter Gustav II Adolfs död till och med sommaren 1635*, Stockholm.
- Id., 1932, *Fältmarskalkarna Johan Banér och Lennart Torstensson såsom härförare*, Stockholm.
- Troebst, S., 1994, "Debating the mercantile background to early modern Swedish empire-building : Michael Roberts versus Artur Attman", *European History Quarterly*, vol. 24, pp. 485–509.
- Ulsig, E., 2003, "The Nobility of the late Middle Ages", *The Cambridge History of Scandinavia*, Vol. I, Cambridge, pp. 635–654.

- Valjanti, A., 1957, *Gustav Vasas ryska krig, 1554–1557*, Stockholm.
- Wallerstein, I., 1980, *The Modern World-System*, vol. 2, New York. (I. ウォーラーステイン, 川北稔訳, 1987年, 『近代世界システム 1600～1750』, 名古屋大学出版会.)
- Wendt, E., 1935, *Det svenska licentväsendet i Preussen, 1627–1635*, Uppsala.
- Ylikangas, H., 1976, *Klubbekriget : Det blodiga bonde kriget i Finland 1596–97*, Stockholm.
- Ågren, K., 1999, "Rise and decline of an aristocracy : the Swedish social and political elite in the 17th century", *Scandinavian Journal of History*, vol.1, pp. 50–80.
- Österberg, E., 1971, *Gränsbygd under krig : Ekonomiska, demografiska och administrativa förhållanden i sydvästra Sverige under och efter nordiska sjuårskriget*, Lund.

(2009. 12. 3 受理)

